

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25511003

研究課題名(和文) 在日朝鮮人ハンセン病回復者の記憶と展示表象に関する基礎的研究

研究課題名(英文) A Basic Study on Memory and Museum Exhibit of Zainichi Koreans Hansens Disease Patients

研究代表者

君塚 仁彦 (Kimizuka, Yoshihiko)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：00242230

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：ハンセン病回復者の実態は重層性、多重性を帯びているにもかかわらず、日本国内に生きる在日朝鮮人ハンセン病元患者・回復者の記憶については、その記録化や展示表象に向けての十分な調査・研究が行なわれてこなかった経緯がある。本研究では、国内の療養所に生活する回復者の多様な実態に着目し、在日朝鮮人ハンセン病回復者の歴史的形成過程や現状を調査するとともに、彼ら、彼女らの記憶を誰がどのように記録し、展示表象への回路が創りだされようとしているのかを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Despite the complexity, sufficient investigation and research has not been done about the history of Zainichi Koreans(Zainichi chosenjin) leprosy patients living in Japan and reality of leprosy patients. At the same time, the study on the exhibited has not been sufficiently performed. First, I clarify considered historically the formation process of Zainichi Koreans leprosy patient, who is on how to exhibit, their history. Second, I present the way of a new exhibition about the cultural representation of Koreans in Japan leprosy patients.

研究分野：博物館学

キーワード：ハンセン病 博物館 在日朝鮮人 展示 表象文化

1. 研究開始当初の背景

1990年代のヨーロッパを中心とするショーアをめぐる「記憶論争」の影響も受け展開した「負の歴史」の当事者による博物館設立運動は、「記憶」の戦いとしての側面を持ちつつ、日本でもいくつかの問題を軸に、特に1990年代から見られ始めた。

ハンセン病問題のほか、沖縄戦、原爆、部落差別、アイヌ民族、在日朝鮮人、日本軍「従軍慰安婦」、水俣病など、差別・抑圧を受けた側による民間ベースでの博物館設立の動きは、日本の博物館史において20世紀後半から世紀末を経て、現在に至るまでのきわめて特徴的な現象である。この動向は、博物館数の多さという数的な観点から見ても日本独自の動きであると言ってよい。

中でも、ヨーロッパなどを除き、世界的に見て、「医学」「医療」や「病気」そのものをテーマに取り上げる博物館が多くない中で、ハンセン病、ハンセン医学、ハンセン病回復者の歴史等をテーマとする博物館がこれだけ存在するのは日本独自の動きであり、世界的に類例がない現象である。これらは「負の歴史」である患者に対する絶対隔離政策の実施などの歴史的経緯に基づく状況であり、2013年時点では全国の国立療養所内に6館、私立3館が開設されていた。(2017年現在、全国の国立療養所内には11館 私立4館、合わせて15館が開設され、今後もしばらくは数館が増える見通しである。【表】参照)

しかし、ハンセン病回復者の実態は重層性、多重性を帯びている。にもかかわらず、彼ら、彼女らは、「回復者」「元患者」などの概念で括られ、日本国内に生きる在日朝鮮人ハンセン病元患者・回復者の記憶については、その記録化や展示表象に向けての十分な調査・研究が行なわれてこなかった経緯がある。本研究の研究開始当初の背景には、このような状況があった。

研究代表者はこれまで、近代東アジア地域における戦争記憶・植民地記憶の記録を基軸に研究を進めてきたが、研究過程において、東アジアで営まれた植民地主義を背景とする在日朝鮮人の記憶継承、とりわけ植民地時代に近代化の象徴として強制隔離のために開設された病院や療養所における在日朝鮮人ハンセン病回復者の記憶継承の問題に直面するに至り、回復者全体への社会的差別だけではなく、回復者内のマイノリティーに対するレイシズムによる重層的差別の存在に気づかされ、数年間、予備調査を進めてきた。その結果、在日朝鮮人ハンセン病回復者自身によるいくつかの生活記録集(岡山県邑久光明園・崔南龍編著『孤島』解放出版社、2007年など)の他には記録が組織的に蓄積されていないことが明らかとなった。

また、そのような状況下でハンセン病博物館が各地に整備され、人権回復と記憶継承のための展示が形成されているが、ごく一部を除き、彼ら、彼女らの生活記憶は展示表象の

対象とはならず、結果的に散逸や隠蔽の危機にあるという現実に気づいた。本研究着想の根本的な問題意識はこの点にある。

館名	設立年
長島愛生園歴史館	2003年
菊池恵楓園社会交流会館(歴史資料館)	2006年
国立駿河療養所ハンセン病資料室(駿河ふれあいセンター)	2006年
しんせい資料館(国立療養所東北新生園内)	2006年
国立ハンセン病資料館(旧・高松宮記念ハンセン病資料館)	2007年
栗生楽生園社会交流会館	2008年
重監房資料館(国立療養所栗生楽生園内)	2014年
星塚敬愛園社会交流会館歴史展示室(星塚の歴史)	2014年
沖縄愛楽園社会交流会館	2015年
邑久光明園社会交流会館資料展示室	2016年
ハンセン病歴史資料館・人権啓発交流センター(国立療養所宮古南静園内)	2016年
リデル・ライト両女史記念館(熊本市)	1994年
復生記念館(御殿場市)	2004年
リーかあさま記念館(群馬県草津町)	2013年
コール館(熊本市)2016年、元待労院資料館よりリニューアル・名称変更)	2016年

【表】日本国内の「ハンセン病博物館」(2016年6月現在、網掛けグレー部分は国費で設立、ピンク部分は私設団体が設立)

2. 研究の目的

そのような状況に鑑み、本研究では、国内の療養所に生活する回復者の多様な実態に着目し、在日朝鮮人ハンセン病回復者の形成

過程を歴史的に解明、考察するとともに、彼ら、彼女らの記憶をどのように記録し、展示表象への回路が創りだそうとされているのか、いないのか、彼ら、彼女らの何が残され、表象されているのか等について、国内をメインに、記憶が交差する東アジア・韓国を含めて調査を進め、重層性を帯びたその実態を解明することを目的とした。

特に、彼ら、彼女らが博物館や展示などの表象行為に対していかなる意識を持っているのかなども展示実態調査等とともに調査の柱に加えた。

3. 研究の方法

前述したように、本研究では国内の療養所に生活する回復者の多様な実態に着目しつつ、とりわけ在日朝鮮人ハンセン病回復者に焦点を当て、文献研究と高齢化で数少なくなった各園の回復者に対するインタビュー調査、関係者へのインタビュー調査、展示調査、園内遺跡等調査等を行った。

これまでの研究活動での経験から、全員が重い個人的体験をし、また高齢者・身体障害者でもある在日朝鮮人ハンセン病回復者からのインタビュー調査はそう容易に行えるものではないことは理解できていた。

そのため、これまで予備のインタビュー調査を行った当事者を中核に、各園自治会、当事者および互助会などの当事者団体などとの密接な連絡を取りつつ、「もの」資料の展示表象をも研究対象にするため、全国各園の「ハンセン病博物館」を統括している国立ハンセン病資料館（東京都東村山市・国立療養所多磨全生園内）からの実質的な協力を得ながら研究を進めた。

緊急性の観点から、国内の各国立療養所と民間療養所、「ハンセン病博物館」における在日朝鮮人ハンセン病回復者に関する第1次インタビュー調査および文献資料・「もの」資料調査を行う。引き続き当事者からのインタビュー調査を継続しつつ、各療養所（6園）とハンセン病博物館における在日朝鮮人ハンセン病回復者に関する記録および「もの」資料の収集保管状況と展示表象に関する現状を調査した。

韓国内の病院附属博物館（国立小鹿島病院歴史資料館）における在日朝鮮人ハンセン病回復者の有無確認と生存の場合のインタビュー調査および文献資料、「もの」収集保管・展示表象調査を行った。

これらの調査結果を基盤に、在日朝鮮人ハンセン病回復者の記憶と展示表象に関する基礎的知見を整理し、在日朝鮮人ハンセン病回復者の記録論、「伝える」「継承する」という観点から展示表象文化のあり方を具体的に提案するために、沖縄やドイツなどの先進事例の現地調査を行った。

4. 研究成果

国内におけるハンセン病問題の研究は歴史

学や社会学・教育学などの多領域で行われているが、当該テーマを正面から取り扱った調査研究は歴史学における一部先行研究（立教大学山田ゼミナル編『生きぬいた証に』緑陰書房、1989年など）を除いて見ることができない状況であった。が、その後、当事者の証言記録として価値のあるいくつかの文献が発表されている。（例えば、崔南龍『一枚の切符 - あるハンセン病者のいのちの綴り方』みすず書房、2017年）しかし、その数はごくわずかであり、また、関連遺跡や展示資料、表象論に関する研究にはほぼ動きがないままの状態であった。このような状況に基づいて、各年度において以下の研究成果を得ることができた。

（1）平成25年度

研究計画の初年度であり、これまで手付かずであった場所や、全員が高齢者であることを考慮して各地で生活されている当事者へのアプローチを優先的に実施した。

国立療養所では、沖縄愛楽園「社会交流会館」（この時点では開設準備中）、国立療養所東北新生園「しんせい資料館」、国立療養所栗生楽泉園「社会交流会館」、同「重監房資料館」、国立療養所長島愛生園歴史館、国立療養所邑久光明園、国立駿河療養所ハンセン病資料室（駿河ふれあいセンター）など、私立の施設では神山後生病院で展示調査等を実施した。また、園内遺構・遺跡について詳細な実地調査を行ったとともに、各療養所の入所者自治体や互助会などの組織を通じ丁寧に確認を得ながら、在日朝鮮人ハンセン病回復者（3名）からのインタビュー調査を実施することができた。国立療養所長島愛生園歴史館では在日朝鮮人ハンセン病回復者の証言映像を用いた展示表象が行われており、また関連史跡の整備も行われていた。

海外調査については、韓国・小鹿島病院および附属の「ハンセン病博物館」を対象に資料・展示調査を実施した。旧植民地である小鹿局内における遺物や遺構、保存建築物等の調査を実施し、同時に博物館担当の職員、入所者自治会関係者にインタビュー調査を行った。2016年、韓国・小鹿島病院には大規模な国立ハンセン病博物館がリニューアルオープンされているが、在日朝鮮人に関する記録は残るものの、展示表象はほぼ無いに等しい状況である。

（2）平成26年度

研究計画の2年目に当たる本年度は、国立ハンセン病療養所内に新たに開設された博物館の現地調査と保存措置の決まった歴史的遺構の調査、関係者および入所者からのインタビュー調査などを国内3か所で行った。また、国立療養所の世界遺産化を目的とする研究会への参加、医療関係者以外にも広がりを見せるハンセン病学会への参加など、研究テーマの視野に広がりを持たせる方向

で研究を進めることができた。

国内の現地調査として実施したのは、継続も含めて以下の通りである。国立療養所栗生楽生園、重監房資料館および遺構の第2次現地調査ならびに入所者からのインタビュー調査、国立療養所沖縄愛楽園「社会交流会館」の展示制作に関する現地調査ならびに展示制作担当関係者・入所者からのインタビュー調査、国立療養所星塚敬愛園「社会交流会館・星塚の歴史」における常設展示に関する調査および作成担当者・入所者からのインタビュー調査等である。

また、研究内容に新たな知見を取り入れ、厚みを加えるために、世界遺産化を目的とする公開研究会（岡山）への参加、医学関係者が中心であったハンセン病学会への参加と医学関係者との研究交流、災害と展示研究会およびフォーラムへの参加および研究組織への参加、関連して東日本大震災の記憶と記録および伝承に関する現地調査等を行った。これらの調査研究活動を通して、在日朝鮮人ハンセン病回復者の記憶の記録化に関する更なるデータを得ることができたとともに、各地の療養所で進められている博物館設立の状況・展示表現の在り方を詳細に把握することができた。

（3）平成27年度

これまでの成果を踏まえ、各園における当事者の聞き取り（2名）を継続的に行った。また、関連資料の保存状況、展示状況等に関する補足的な調査を行い、また、より発展的な研究方向や内容を構築するために「負の記憶」等の展示表象で先進的な動向を見せているドイツ・イギリスでの現地調査を実施した。国内調査では、国立療養所沖縄愛楽園での遺跡調査を行い、同時に開園のハンセン病博物館である「沖縄愛楽園社会交流会館開館記念シンポジウム」において記念講演を行った。シンポジウムを通して、展示表象に関する現地関係者や地域住民との意見交換等を行うことができた。

また国内調査では、国立療養所多磨全生園での継続的なインタビュー調査を行い、国立で「語り部」を務める入所者（日本人1名、在日朝鮮人1名）から国立ハンセン病資料館の展示表象の成果と課題等に関して集中的に聞き取りを行った。その際、当事者から記憶の「語り継ぎ」における展示の役割と意義、そして限界についての貴重な証言を得ることができた。

ただし、27年度調査で総括的なインタビュー調査を行う予定であった国立療養所長島愛生園と国立療養所栗生楽泉園で生活されている2名の在日朝鮮人入所者（いずれも90歳前後）について、1名が認知症を発症され、1名が園内移動中の転倒事故で入院されたことで調査がキャンセルになり、調査全体の計画の見直し（補助事業期間の延長）が必要となった。

（4）平成28年度

調査対象者の事情で研究期間を延長し研究計画の最終年度となったが、補足的および総括的な調査を計3件実施した。

国立療養所長島愛生で生活されていた在日朝鮮人回復者（金泰九氏）は、残念なことに逝去され補足調査を実施することはできなかったが、彼が記録した在日朝鮮人入所者に関する史跡や遺物に関する最終的な現地調査を行うことができた。また、国立療養所栗生楽泉園で生活されている回復者（金夏日氏）については、回復されたこともありインタビュー調査を行うことができ、関連史跡の調査も実施した。

全国各地の国立療養所では博物館整備が進みつつあるが、在日朝鮮人回復者の記憶を意図的に排除するような動きは見られない。展示表象としては、国立ハンセン病資料館（多磨全生園）や長島愛生園歴史館などで展示のごく一部や証言映像展示でこの問題が取り扱われているにすぎない。在日朝鮮人回復者の各園での入所者数が要因の一つではあるが、積極的にこの問題を取り上げていこうとする組織的な動きはきわめて微弱であるものの、長島愛生園では在日朝鮮人の努力で開削された道路がそのまま残されており史跡化されているが、それを隠滅するような動きも見られない。また、文献資料などで発言を記録として残す当事者もあり、博物館展示活動に活用するコンテンツは確実に増えつつある。

長島愛生園・邑久光明園を中心に、ハンセン病療養所を世界遺産化しようとする動きが進行しているが、展示や史跡を再整備するプロセスの中で、在日朝鮮人回復者の記憶をどのように位置付けるのかが問われている。ハンセン病問題が「終わった課題」ではなく、いまだ世界的には南アジア・東南アジア地域を中心に現在進行形の問題であることを念頭に取り組みを継続する必要があると思われる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

君塚仁彦、博物館における「対話」による記憶「継承」活動の意義 - ひめゆり平和祈念資料館の取り組みを中心に - 査読なし、東京学芸大学紀要 総合教育科学系 第68集、2017、89 - 99

君塚仁彦、ハンセン病回復者の記憶と博物館展示に関する基礎的研究(1) - 在日朝鮮人回復者の展示をめぐる研究視点 - 査読なし、東京学芸大学紀要 総合教育科学系 第65集、2014、9 - 18

君塚仁彦、戦争記憶の伝達・継承と歴史

教育の場としての博物館、査読なし、歴史評論 772、2014、50 - 62

()

〔学会発表〕(計5件)

君塚仁彦、「ハンセン病博物館」における社会啓発・人権教育活動の課題と方向性、第90回日本ハンセン病学会学術大会、国立療養所菊池恵楓園恵楓会館(熊本県・合志市)、2017.6.10

君塚仁彦、博物館における「対話」による記憶「継承」活動の社会教育的意義と課題、日本社会教育学会第63回研究大会、弘前大学(青森県・弘前市)、2016.9.17

君塚仁彦、植民地主義と博物館・博物館学、東京学芸大学フォーラム「帝国主義・植民地主義と博物館」、東京学芸大学(東京都・小金井市)、2015.11.14

君塚仁彦、ハンセン病患者・回復者による「学び」と博物館展示 在日朝鮮人の活動事例を中心に -、日本社会教育学会第62回研究大会、首都大学東京(東京都・八王子市)、2015.9.19

君塚仁彦、ハンセン病歴史資料館の可能性 - その未来に期待するもの -、沖縄愛楽園社会交流会館開館記念シンポジウム、国立療養所沖縄愛楽園社会交流会館(沖縄県・名護市)、2015.6.14 (現地メディアTV 新聞「沖縄タイムス」等で報道)

〔図書〕(計2件)

石井正己、君塚仁彦他、博物館という装置—帝国・植民地・アイデンティティ分担執筆、勉誠出版、2016、391(367 - 386)

李修京、君塚仁彦他、グローバル社会と人権問題 - 人権保障と共生社会の構築に向けて、分担執筆、明石書店、2014、278(168 - 174)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

君塚 仁彦 (KIMIZUKA Yoshihiko)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：00242230

(2) 研究分担者

()
研究者番号：

(3) 連携研究者

()
研究者番号：

(4) 研究協力者